

韓国の日本語教育における慣用句の研究

—動詞慣用句に対する使用実態の比較分析を中心に—

宋 誓 天

1. はじめに

韓国語母語話者からみた日本語の慣用句は、日本語母語話者がそれを慣用句として認識するか否かにかかわらず、韓国語と日本語において慣用句を構成している個々の語の意味レベルの違いが判然としている語句のことである。そこで、韓国人学習者は日本語の慣用句を韓国語の構成要素との対応から見て、辞書的意味の理解や文法知識のみで誤解、誤読しがちである。

しかし、韓国の日本語教育では慣用句の理解を当人の自然の会得にまかせているのが現状であり、従来の慣用句の研究も統語論・意味論的な観点での比較研究が多く、まだ日本語教育における体系的な研究までは行われていない。

本稿では動詞慣用句の概念を探り、日本語母語話者の慣用句に対する使用度を調査する。その後、韓国人日本語学習者の使用実態と比較分析し、慣用句に対する理解の実態を明らかにすることを目的とする。

韓国の日本語教育における慣用句教育を考える手始めとして、日本の中学校の『国語』⁽¹⁾教科書に載せられている慣用句を抽出した。勿論、日本の『国語』教科書が慣用句を学ぶためだけのものではないことは明白である。しかし国語教科書には、その国の多様な分野の作品が掲載されているため、そこで多用される語句は日本人が一般的に日常よく接する語句の一部であると考えてよいと思われる。また、日韓の双方においての実際の使用度や理解の実態を比較・分析を行うため、使用される語彙が易しいと思われる中学校の教科書が本調査に適切であると考えられたためである。

2. 動詞慣用句の概念及び定義

慣用句の研究は1960年代後半あたりから始まって、1970年代以降少しずつ研究が行われてきたが、他の分野に比べて進んでいるとは言いがたい。それに関連分野（諺・格言・連語など）との境界も明瞭ではないが、宮地裕（1982）⁽²⁾は一般の連語句（語の連結体で句としてのまとまりを持つもの）よりも結合度が高いものが慣用句であり、格言・諺と違って、歴史的・社会的な価値観を表すものではないと区分している。また動詞慣用句とは、品詞別の分類において「名詞+

(格助詞) + 動詞」形の慣用句や動詞を含むその他の慣用句を広義に総称し、このような動詞慣用句が「常用慣用句」の63%ほどに及ぶのであると述べている。

村木新次郎 (1991)⁽³⁾ は名詞と動詞の語結合を大きく、「慣用句」と「機能動詞結合」に分けて分類・考察しているが、いずれも形態的には名詞と動詞の組み合わせ、意味的には一つの単語と同様のもので動詞相当の働きをなす句であることが明らかである。

特に、森田良行 (1985)⁽⁴⁾ は慣用句や慣用句的な言い方1813例を集め、句構成からみた文法的形式と、意味面から見た句結合の緊密度とを分析した。そこで、動詞句から慣用句を区別する基準はもはや文法レベルの問題ではなくて、意味レベルに属することで、一口に動詞慣用句と言っても、人によって慣用句の範囲に出入りがあることは致し方ないことであると指摘している。

3. 調査の概要

3. 1 調査の方法

まず、日本の中学校国語科用 (文部省検定済) の『国語』1・2・3を資料にし、慣用句を広義でとらえる立場からその全てを取り出した。慣用句抽出及びアンケート資料の収集は2003年11月～2004年1月と2004年8月～9月の二回行った。各教科書別に抽出された慣用句の数は次の〈表1〉のようになる。

〈表1〉教科書別の慣用句の数

教科書	国語1	国語2	国語3	総合
異なり語句(延べ語句)	174 (218)	248 (300)	122 (155)	479 (673)

これらを全部『広辞苑 (第五版)』『日本国語大辞典 (第二版)』『国語慣用句大辞典』で調べ、本稿では二つ以上の辞典類で共通に慣用句として扱われている174句の動詞慣用句だけを分析対象とする。アンケートは日本語母語話者と韓国人日本語学習者、両方それぞれの慣用句の使用度や理解度を五段階評価⁽⁵⁾で尋ね、知らない句の場合は言葉から推測される意味を書いてもらった。

3. 2 被験者

本調査の被験者は、日本語母語話者50名および韓国人日本語学習者が78名の計128名である。日本人は下関市の大学生や一般人などで構成されており、韓国人は全員が日本や韓国の大学・大学院に在学中の学生で日本語・日本文学関連を専攻している。また、日本語能力試験実施案内 (2001)⁽⁶⁾に基づき中・上級学習者に分けてみたが、両国の被験者の詳細は〈表2〉の通りである。

〈表2〉 アンケート資料総数および内訳

被験者グループ	内 訳		人 数	
日本人母語話者 (以下Jとする)	大学1年生	(以下 ja とする)	20	計50名
	大学2年生	(以下 jb とする)	22	
	一 般 人	(以下 jc とする)	8	
韓国人日本語学習者 (以下Kとする)	日本語学習中級者	(以下 ka とする)	50	計78名
	日本語学習上級者	(以下 kb とする)	28	

4. 調査の結果と分析

4. 1 Kの日本語慣用句に対する認識

被験者Kには、動詞慣用句の使用度(資料1)と日本語慣用句関連のアンケート調査(資料2)も共に行った。まず、慣用句学習に対する興味度や必要性などの細部質問である。質問項目は、各々5段階評価(5:はい~1:いいえ)で尋ねたところ、多くの肯定的結果が得られた。質問項目や回答の平均値を〈表3〉に示す。

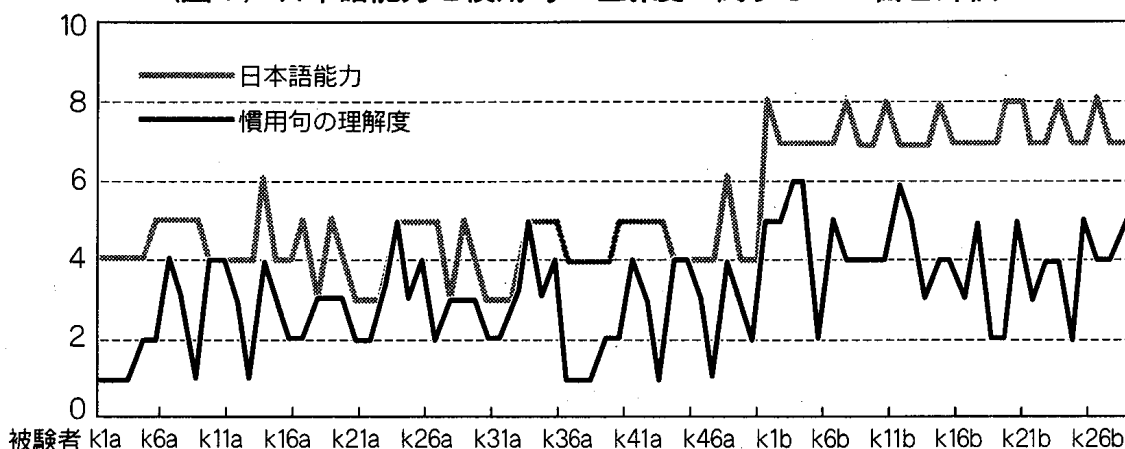
〈表3〉 慣用表現に関する質問項目および平均回答

質 問 IV-(1)	ka	kb	K平均値
1) 学校の授業で日本語の慣用表現を習っていますか?	2.4	2.5	2.5(49%)
2) 日本語の慣用表現に興味がありますか?	3.5	4.1	3.8(76%)
3) 日本人は実際に慣用表現をよく使っていると思いますか?	3.4	3.4	3.4(68%)
4) 日本語学習において慣用表現の学習は必要ですか?	4.4	4.6	4.5(90%)
5) 日本語の慣用表現は難しいと思いますか?	4.0	3.9	4.0(79%)

質問4)と5)の理由としては多くが「円滑なコミュニケーションをするため」、「語句の意味通りに解せないから」、「日本語らしい表現であるから」などの答えが重なっている反面、質問5)に「1~2」と答えた全回答者は「韓国語と似ているから日本語慣用表現は易しい」という意見であった。

次は自分の全体的な日本語能力と慣用句に対する理解度を、各々10段階(1: 下下~10: 上上)で自己評価した項目で、その結果をまとめると〈図1〉のようになる。

〈図1〉日本語能力と慣用句の理解度に関するKの自己評価



〈図1〉に示した通り、回答者の多くが自分の全体的な日本語能力より慣用句の理解度を低く評価している。その平均値は「-2.4」であるが、ka「-1.6」よりkb「-3.2」のほうがマイナス評価をしているという面で、従来の中級以上の学習者に対する日本語教育が慣用句に関してあまり適切ではなかったというように考えられる。

4. 2 Jの動詞慣用句の使用度と理解の実態

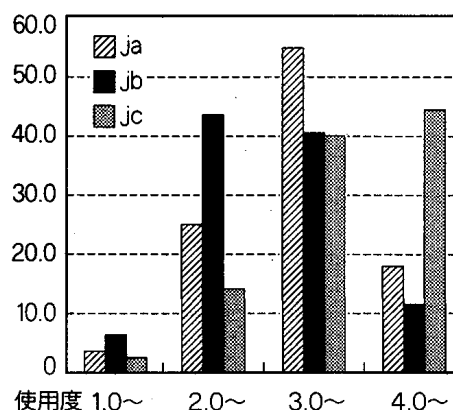
Jの動詞慣用句の使用度は平均「3.3」で、これはKが普段感じているJの慣用句使用度の数値とほぼ同じである（表3参照）。しかしja（3.3）、jb（3.0）と比べ、一般人であるjcの使用度が「3.7」であるという面から考えると、必ずしもKが、実際の生活の場で使われているJの慣用句に気づいているとは言いがたい。

Jの動詞慣用句の使用度をまとめると次の〈表4〉と〈図2〉のようになる。

〈表4〉Jの動詞慣用句の使用度（100%）

使用度	ja	jb	jc	J平均
4.0以上～	31句 (17.8)	19句 (10.9)	77句 (44.3)	27句 (15.5)
3.0以上～	95句 (54.6)	70句 (40.2)	69句 (39.7)	97句 (55.8)
2.0以上～	43句 (24.7)	75句 (43.1)	24句 (13.8)	43句 (24.7)
1.0以上～	5句 (2.9)	10句 (5.8)	4句 (2.3)	7句 (4.0)
平均使用度	3.3	3.0	3.7	3.3

〈図2〉Jの動詞慣用句の使用度



J平均の使用度「4.0以上」は27句で、その中には「汗をかく、腹が立つ」

などの形態的に語連結が固定されている句がある反面、「汗を流す、目が回る」のように、語句の表す文字通りの意味のほかに、句全体が比喩的意味を持っている句も多数含まれている。

- ① 汗をかく、世話になる、気をつける、嘘をつく、腹が立つ、
汗を流す、目が回る、夢を見る

しかし上記の慣用句の定義でも指摘されているように、慣用句の定義に決定的なものではなく、研究者によってもその分類基準が異なっている。従って本稿では、宮地（1982）や国広（1985）⁽⁷⁾の分析を踏まえつつ、連語成句的慣用句⁽⁸⁾も広義の慣用句であると見なすことにする。

使用度「3.0以上」の慣用句はJ平均の55.8%以上で、語句の数が最も多い。しかし、「2.0以上」ではjbの語句が43.1%で、他の被験者グループの約2～3倍を占めている。これは使用度「2.0～3.9」での語句においてJの構成員の顕著な個人差のためである。具体的な例をja、jb、jcの使用度と共に挙げると次の通りである。

- ② 罰が当たる (3.3/2.9/4.0)、心にとめる (3.3/2.7/4.3)、
身にしみる (3.3/2.9/4.1)、手間をかける (3.5/2.9/4.1)

次に、使用度「1.0以上」の大抵の慣用句は全てのグループでの使用度のごく低く、「意味も分からない」という意見が多かった。そこでJは、低使用度の慣用句を含め、意味が分からない母語の慣用句に接した際、その意味をどう推測しがちであるのか、またそれらは外国語の慣用句として理解しているKとはどう違うのかなどを把握する必要がある。そのため、Jの推測の仕方を分類してみた結果、次の三つに分けられた。

一つ目は、慣用句を構成する語句のいずれかに焦点を当て、その句が慣用句の全体意味にまで拡大される場合である。例えば、「口を糊する」や「木に竹を継ぐ」などがある。即ち、「糊＝物を貼り付けたりするもの」や「継ぐ＝結びとめる、長く続くようにする」などの語句の意味がその慣用句の全体意味にまで拡大され、「(口に糊したように) 黙る、喋らない、秘密を守る」や「(木と竹のような) 違うものを長くつなげる」などと推測したと考えられる。

二つ目は、慣用句の構成語の個々の表面的な意味を単純に受取る場合である。ここには、「手を振る」や「手を延ばす」などを「(手を振る動作から) 別れる」や「(欲しい物を取るため手をのばす様子から) すごく欲する」という例が挙げられる。

三つ目は、慣用句の構成語である同一の名詞につられて、それと関連のある他の表現と結びつけてその慣用句の全体意味を推測する場合である。「頭をもたげる」や「肩で息をする」などの例では、それぞれ「頭」や「肩」から連想される

他の表現を思い浮かべ、その慣用句の全体意味を「頭を下げる、頭をあげる」や「肩を落とす」などのように推測したと見られる。

その他「折りに触れる」を「珍しい」と、「尻を持ちこむ」を「関わっている」などと慣用句の構成語を恣意的に解釈したところから慣用句の解釈に個人差が見られるものは分類から外した。

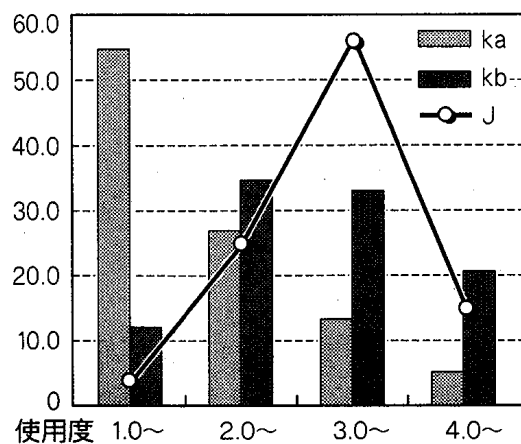
4. 3 Kの動詞慣用句の使用度と理解の実態

Kの動詞慣用句の使用度は平均「2.6」で、ka と kb の平均値はそれぞれ「2.1」、 「3.0」である。この差は日本語学習能力の中・上級の差に因るものであると考えてもよいだろう。しかし、Kから得られた慣用句の使用度は〈表5〉と〈図3〉に示した通り、Jの平均使用度とはかなり相違する結果となる。

〈表5〉 Kの動詞慣用句の使用度 (100%)

使用度	ka	kb	K平均	J平均
4.0以上～	9句 (5.2)	36句 (20.7)	23句 (13.2)	27句 (15.5)
3.0以上～	23句 (13.2)	57句 (32.8)	40句 (23.0)	97句 (55.8)
2.0以上～	47句 (27.0)	60句 (34.5)	53句 (30.5)	43句 (24.7)
1.0以上～	95句 (54.6)	21句 (12.1)	58句 (33.3)	7句 (4.0)
平均使用度	2.1	3.0	2.6	3.3

〈図3〉 Kの動詞慣用句の使用度



〈図3〉ではKの使用度の棒グラフが、Jの使用度を表している折れ線のグラフの山と微妙にずれている結果が得られる。これは一見、外国語として日本語を学んでいる学習者の単なる語彙力の不足による結果のようであるが、内容的にはそう簡単に言いきれない。使用度順に具体的な例を見てみよう。

まず使用度「4.0以上」の慣用句である。特に kb の場合は、語句の数が ka の約4倍でありながらも、使用度の面ではJより高く、語句一つ一つの全てが、Jの使用度調査でも高く評価されたものである。つまり、使用度面でK (4.4)のほうがJ (4.2)より高いという点から、Kが限られている慣用句を積極的に使っているのが分かる。

使用度「3.0以上」では、kaの慣用句の数が約kbの半分には達していないのが目立つ。その根本的な原因は、勿論kaとkbの日本語学習状態の差であるが、その原因は次の二つに分析される。

一つは、日本語能力の中級レベルであるkaは、まだ敬語や自動詞・他動詞などのシタクスの学習がはっきり成り立っていないため、これらが用いられた

慣用句に対しても使用度が低く、語句の数が kb を下回る場合である。() の数字は ka、kb の使用度である。

- ③ お目にかける(2.7/4.6)、心を動かす(2.7/3.9)、顔色が変わる(3.0/4.0)

他の原因としては、kaの方が比喩的意味を持つ慣用句に対し、文字通りの解釈にしか気づかず、その慣用句の使い方が覚束無くなっているからである。因みに使用度「3.0以上」の場合、原因は使用度「2.0以上」の場合とも関わっている。

- ④ 横になる(3.2/4.0)、手にする(3.0/4.0)、肩を並べる(2.5/3.8)

ここで予め補いをつけておくと、上記の調査の方法で述べたように、使用度「2」とは、使用度「5段階」のうち、「意味は分かるが、あまり使わない」という場合である。しかし、この使用度「2」が、外国語として日本語を学習するKに、日本語を幼児期から母語として身につけたJと全く同じ意味であるとは限らない。

即ちこの使用度「2」は、Jにとっては、かつてから語句や慣用句の意味が分かっているという前提のうえで、その表現を使うのかどうかという本義の使用度を表す数値である。しかしKにとっては、初めて接した表現であっても、その意味が確かに分かる慣用句であれば、その意味と共に使用度「2」に答えるようにした。また使用度「1」には、全く意味が分からない慣用句のみを、そのイメージと共に記入するようアンケート調査を改めて行った⁽⁹⁾。

まず、使用度「2.0以上」の結果である。上記の〈表5〉でも示したように、使用度「2.0~2.9」の慣用句は、〈図3〉のJと比べあまり隔たりが大きい。しかし、その差はKの実際の使用度というよりシタクスのな日本語学習や比喩的意味を持つ慣用句に対する理解ができてないため、これはkaとkbの差が大きくなる原因にもなる。

- ⑤ 腹を立てる(2.5/3.5)、縁が切れる(1.8 3.7)、耳を傾ける(1.9/3.5)

また連語成句的慣用句において、個々の語の意味的な関連性による情報が得られず、kaのほうだけが「表現型慣用句」として理解している例がある。

- ⑥ 口を利く(1.8/4.0)、世話を焼く(1.8/3.2)、
足が棒になる(1.8/3.2)、手間をかける(1.7/3.2)

他には、Kの全体が「表現型慣用句」として理解している場合である。これらの多くは、韓国語の慣用句に使われる語句や意味が全く同じであるという特徴があるため、kaとkbの日本語学習レベルの差があまり見られない。

- ⑦ 念頭に置く(2.4/2.7)、舌を出す(3.1 2.6)、心が通う(2.6/2.5)、
籍を置く(2.4/2.1)、唇を噛む(2.0/2.6)

次は使用度「1.0以上」の慣用句である。Jの調査では、ここに属する語句が被験者の全グループで殆ど一致しているが、Kの場合は〈表5〉の通り語句の数も多く、個人差が甚だしい。そのため、統計的な数値による分析よりも、意味解釈が不可能な「解釈型慣用句」に接した際、Kはどう理解しているのかを分析することにする。Kから収集した資料に基づいて、それぞれの理解の実態を分類してみると、次のような四つの類型に分けられる。

一つ目は、慣用句を構成する語句のいずれかに焦点を当て、その句が慣用句の全体意味にまで拡大される場合である。ここには「語り草になる」や「音を立てる」などの慣用句を「おしゃべりする、嫌な話をする」や「歌う」などの意味であると推測する例がある。これはそれぞれの「語る」や「音」という語句の意味が、その慣用句の全体意味にまで拡大されたというところからJの推測の類型と同様であるとも考えられる。

しかし、多義の動詞が用いられた慣用句の場合はその意味推測においてJとの違いがある。即ち、「お目にかける」や「息をつく」のように「かける・つく・とる・うつ」などの多義の動詞が用いられた場合は、その動詞の多義のうち「かける→物が揺れないよう固定する」や「つく→身にまつわる」のような一つの意味だけが句全体にまで拡大された場合である。そのため、慣用句の全体意味を「(何かぶら下げているようで) 見苦しい」や「(息がその身にまつわるように) 呼吸する」などと推測してしまう。このような例はKのアンケートで最も多い反面、Jでは全く現れなかった。

二つ目は、慣用句の構成語の個々の表面的な意味を単純に受取る場合である。例えば「大目に見る」や「気を配る」などの意味を、それぞれ「目を大きくして見る」や「自分の元気を分けてあげる」などと推測した例が挙げられる。ここで注目すべきなのは、慣用句を成している構成語の殆どが初級レベルであるにもかかわらず、Kの誤解が多いというところである。これは、現在の韓国で行われている単なる語彙教育の限界を明らかに示していると考えられる。

三つ目は、語彙力の不足による場合である。これらは、上記の一つ目の多義の動詞に対する誤解とは違って、Kの単なる日本語学習レベルによる語彙力が原因になる。そのため、Kの大体が「愛想を尽かす」や「機嫌を損ねる」などの意味を「愛する、愛を告白する」や「機嫌を伺う」などと間違えて推測した。一方、kbに比べて相対的にkaの推測の正確さが劣っている場合もあるが、そこには「穴を埋める」や「息が詰まる」などを「穴を掘る、穴が広がる」や「息を整える」などと推測した例が挙げられる。

四つ目は、それぞれの構成語の意味が分かっても、慣用句として固定された特定の意味を母語である韓国語に照らして推測する場合である。ここでは、まず「死力を尽くす」や「念頭に置く」などのように各々の語句が韓国語の慣用句でも全く同じ語句でありながら、その全体の意味においても日本語の慣用句と変わ

りがない場合が考えられる。このような慣用句はKの日本語学習段階とは関係なく、意味推測の正確度も高い。

しかし、日韓両国語の慣用句のうち注意すべきなのは、同じ語句で構成されている慣用句であってもその使い方において微妙に食い違ったり、同意を表す慣用句であってもその構成語が違ったりするものである。例えば「へそで茶を沸かす」や「舌打ちをする」の場合、韓国語の慣用句のうち「へそ」や「舌打ち」などが用いられたところに着眼し、その全体の意味を「(へそが抜けるほど)面白い」や「可愛そうに思う、愚痴をこぼす」などと韓国語の慣用句に照らし合わせてしまう例が少なくない。これは既に母語の意味が固着されている場合が多くて、使い方が微妙に違う表現に接しても気づかず、母語の語句に縛られたまま石化される危険を孕んでいる。

その他、母語干渉や日本語能力などの具体的な原因による誤解ではなく、日本語以外の学習を含めた個人差により「身を削る」を「反省する」と、「横面を張る」を「様子を見る、うぬぼれている様子、意地を張る」と解するなどの例は分類から外した。

5. まとめと補足

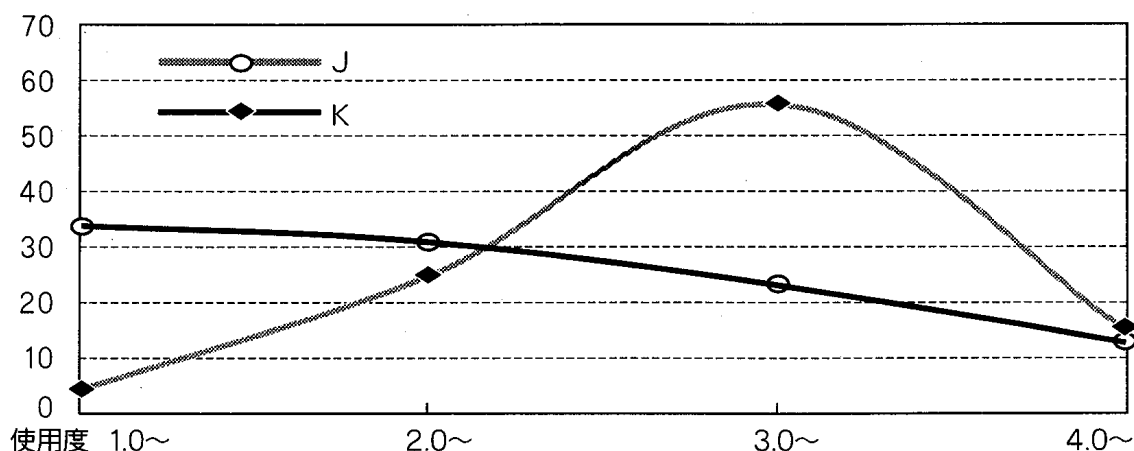
外国語教育の目的が、言語に関する知識の学習から実生活での適切なコミュニケーション能力を身につけることであると考えると、二つ以上の語結合体が全体として、ある固定した意味を表す慣用句の学習は欠かせないとも言える。また、慣用句は長い間その社会の文化や習慣により自然に形成されたものであるため、外国語として日本語を学習しているものが使いこなすことは決して簡単なことではない。

特に韓国での日本語教育の問題を提起し、日本語教育における慣用句学習の必要性を明らかにするためには具体的な事例の比較分析が欠かせないと言える。そこで本研究では、日本語母語話者(J)と韓国人日本語学習者(K)のアンケート事例に基づき、日本語動詞慣用句の使用度や理解実態の比較分析を行った。

その結果、動詞慣用句のJの平均使用度は「3.3」であり、使用度「3.0~3.9」までの慣用句が全体の55.8%に及ぶ特徴があった。一方Kの平均使用度は「2.6」で、Jの平均値より低く、Kの使用度「1.0~2.9」の慣用句が全体の63.8%に至る対照的な結果が得られた。

JとKの各使用度の段階による動詞慣用句の分布をまとめてみると次の〈図4〉のようになる。

〈図4〉 各使用度の段階による動詞慣用句の分布



〈図4〉をみると、動詞慣用句の分布が使用度「1.0」ではKがJより高く、使用度「約2.0」ではKとJの分布線が交差し、使用度「3.0」ではJの分布度が極めて高くなることから分かる。Jの母国語である日本語の動詞慣用句の分布において、Jの使用度「1.0」は7句（4.0%）にすぎず、全体の分布がKより高くなるということには問題を提起するまでもない。

ここで注目すべきなのは、Kが使用度「2.0（意味は分かるがあまり使わない）」では動詞慣用句の分布度がJより高く、段々その分布度が低くなるというところである。これに対し今回の調査（資料2参照）では、現在韓国の日本語教育の現場で主に行われている文学作品の読解や日本語関連の資格証を取るための試験中心の学習だけでは自然な日本語の習得に限度があると考えられる。しかし、このような現状についての分析は、日本語教育学の多様な角度から研究されるべきであるため、それは今後の課題としたい。

次は、使用度「1.0~1.9」の動詞慣用句を中心とした分析の結果である。Jは、意味が分からない動詞慣用句に接した際、その意味を推測するのに対し、①慣用句の構成語のどちらかの意味が句全体にまで拡大される、②慣用句の構成語の個々の表面的な意味を単純に受取る、③慣用句の構成語である同一の名詞につられて、それと関連がある他の表現から全体意味を推測する、という三つに分けられた。

Kの場合は、①慣用句の構成語のどちらかの意味が句全体にまで拡大される、②慣用句の構成語の個々の表面的な意味を単純に受取る、③日本語学習レベルの差や語彙力の不足による誤解、④母語に照らし合わせて推測する、という四つの類型に分けられた。そのうち、Kの①と②はJの推測類型と同様にも思われるが、細部的には多義の動詞に対する理解不足や単なる語彙レベルの教育上の限界によるところでJの場合とは明らかに区別できる。しかし、このような現状は③で見られた誤解や④の母語干渉による化石化などとも深くかかわっていて、韓国の日本語教育上の根本的な問題点を示唆している。

従って、日韓両国の慣用句に対する多様な観点からの考察は勿論のこと、実際

の韓国の日本語教育に適用するための体系的な慣用句分類はこれからの肝要な作業になると言える。そのため、本研究は具体的な事例の比較分析をとおり、慣用句学習の必要性を明らかにすると同時に、JとKの動詞慣用句に対する理解度や意味推測の類型分類などを試みたという点で、これからの大きな課題究明への糸口になると考える。

注

- (1) 栗原一登 他27名 (1987)『国語』 光村図書
- (2) 宮地裕 (1982)『慣用句の意味と用法』 明治書院 pp. 238~265
- (3) 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房 pp. 214~222
- (4) 森田良行 (1985)「動詞慣用句」『日本語学』1 明治書院 p. 37
- (5) 「5(よく使う)、4(度々使う)、3(たまに使う)、2(意味は分かるが、あまり使わない)、1(意味も分からない)」
- (6) 日本語能力試験実施案内(2001)には、中・上級学習者の基準として、「600~900時間以上の学習レベル」をあげている。
- (7) 国広哲弥 (1985)「慣用句論」『日本語学』4-1 pp. 5~8 明治書院
- (8) ここでは宮地の用語に従うことにする。
国広(1985)では、一般に広く慣用句と称するものを、「慣用句(解釈型)」と「連語(表現型)」に分けて分類しているが、どちらも広義の慣用句であるとしている。国広の用語の使い方が国語学で用いられる「連語」と紛らわしいところがあるためである。
- (9) Kのアンケート使用度「2」と「1」を改めた意図は、国広(1985)の慣用句分類による「解釈型慣用句(受信型)」と「表現型慣用句(発信型)」の見分けをつけると同時に、Kは「解釈型慣用句」をどう誤解しがちであるのかを把握することにある。

参考文献

- 林八龍(2002)『日韓両国語の慣用的表現の対照研究』 明治書院
 国広哲弥(1985)「慣用句論」『日本語学』4-1 明治書院
 栗原一登 他27名(1987)『国語』 光村図書
 国語学会(1980)『国語学大辞典』 東京堂
 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典(第二版)』 小学館
 白石大二(1977)『国語慣用句大辞典』 東京堂
 新村出 編(1998)『広辞苑(第五版)』 岩波書店
 高木一彦(1979)「慣用句の文法的な特徴」『言語の研究』 むぎ書房
 水谷信子・田中望(2002)『日本語教授法Ⅱ』 アルク
 宮地裕(1982)『慣用語の意味と用法』 明治書院
 宮地裕(1982)「動詞慣用句」『日本語教育』47 日本語教育学会
 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
 森田良行(1985)「動詞慣用句」『日本語学』4-1 明治書院

※次の〈資料1〉は、本稿の調査で用いた慣用句である。また、日本語母語話者には〈資料1〉のみを、韓国人日本語学習者には〈資料1〉と〈資料2〉を共に示した。因みに

韓国の日本語教育における慣用句の研究

〈資料2〉は、実際の調査では韓国語で説明されている。

〈資料1〉

1	愛想をつかす	45	気にする	89	車軸を流す	133	膝を折る
2	足が棒になる	46	木に竹をつぐ	90	順を追う	134	膝をつく
3	汗をかく	47	気になる	91	勝負がつく	135	拍子をとる
4	汗を流す	48	疑問を抱く	92	死力を尽くす	136	へそで茶を沸かす
5	頭に来る	49	記録をとる	93	尻を持ちこむ	137	骨を惜しむ
6	頭をかく	50	気をきかせる	94	姿を消す	138	間に合う
7	頭をもたげる	51	気を配る	95	精を出す	139	間を置く
8	穴を埋める	52	気をつける	96	籍を置く	140	身にしみる
9	息が切れる	53	気を取り直す	97	背中を向ける	141	身につく
10	息がつまる	54	口にする	98	世話をする	142	身につける
11	息を切らす	55	口に出す	99	世話を焼く	143	耳に入る
12	息をする	56	口に入る	100	想像がつく	144	耳を傾ける
13	息をつく	57	唇を噛む	101	想像を絶する	145	耳を澄ます
14	息をのむ	58	口を開ける	102	大事にする	146	身を削る
15	命を落とす	59	口をきく	103	ため息をつく	147	胸が痛む
16	異を唱える	60	口をつぐむ	104	知恵を絞る	148	胸がいっぱいになる
17	うそをつく	61	口を閉じる	105	力を入れる	149	胸がはずむ
18	縁が切れる	62	口を糊する	106	辻褄が合う	150	胸に当たる
19	お世話になる	63	苦にする	107	手が入る	151	胸を躍らせる
20	大目に見る	64	首をかしげる	108	手助けをする	152	胸を焦がす
21	音を立てる	65	首を振る	109	手に入れる	153	胸を突かれる
22	お目にかける	66	工夫を凝らす	110	手にする	154	目が合う
23	お役が御免になる	67	桁が違う	111	手に取る	155	目がいく
24	折りに触れる	68	決をとる	112	手間をかける	156	目が覚める
25	顔色が変わる	69	見当がつく	113	手をあげる	157	目が回る
26	顔を赤らめる	70	声が落ちる	114	手を打つ	158	目にする
27	顔を合わせる	71	声を上げる	115	手をかける	159	目につく
28	顔をする	72	声をかける	116	手を貸す	160	目に入る
29	顔を出す	73	声をそろえる	117	手を出す	161	目を凝らす
30	風邪を引く	74	声を立てる	118	手をつける	162	目を覚ます
31	肩が凝る	75	声を放つ	119	手を延ばす	163	目をそらす
32	肩で息をする	76	声を潜める	120	手を振る	164	目をつぶる
33	語り草になる	77	心が通う	121	年をとる	165	目を離す
34	肩を並べる	78	心にとめる	122	途方に暮れる	166	目を見張る
35	雷を落とす	79	心に残る	123	情けをかける	167	目を向ける
36	気がある	80	心を動かす	124	縄を打つ	168	目をやる
37	気がつく	81	心を打つ	125	年季が入る	169	面倒を見る
38	気が取られる	82	心を奪う	126	念頭に置く	170	文句をつける
39	聞き耳を立てる	83	腰を抜かす	127	罰が当たる	171	役に立つ
40	機嫌を損ねる	84	小耳にはさむ	128	鼻をつく	172	夢を見る
41	機嫌をとる	85	辞書を引く	129	腹が立つ	173	横面を張る
42	傷をつける	86	舌打ちをする	130	腹を立てる	174	横になる
43	気に入る	87	舌を出す	131	ピアノを弾く		
44	気にかける	88	舌を鳴らす	132	日が沈む		(五十音順)

〈資料2〉

- I. 所属および学年 ; ① () 大学 ② 学年 (大 年)
 II. 性別および年齢 ; ① 男 / 女 ② 年齢 (歳)
 III. 日本語学習関連 : (各々の質問に '○' をつけて、答えて下さい。複数の答えも可能。)

- (1) 皆さんの日本語学習歴について教えてください。
 ① 高校から日本語を習った。何年間?… ()
 ② 大学で日本語を習った。何年間?… ()
 ③ 日本へ留学したことがある。何年間?… ()
 ④ その他… ()
- (2) 皆さんは日本語能力試験および日本語関連の資格証を持っていますか?
 持っている場合、その種類やレベルを書いてください。
 ① 持っていない ② 持っている … ()
- (3) 学校の授業以外に、日本語能力を磨く方法がありますか?
 ① 学校授業の予習や復習のみ
 ② テレビの日本語講座やラジオ講座、インターネット講座などを利用している。
 ③ 塾や勉強会などに通っている。
 ④ その他… ()
- (4) 皆さんは何故日本語を勉強していますか?
 ① 大学院への進学 ② 日本へ留学 ③ 就職のため
 ④ その他… ()
- (5) 皆さんの全体的な日本語能力はどのレベルですか?
 ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①
 上上 中中 下下

IV. 日本語の慣用表現関連

- (1) 次の1)～5)の質問に対し点数をつけて下さい。各々の点数は下の通りです。

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 1) 学校の授業で日本語の慣用表現を習っていますか?… () | ⑤ ④ ③ ② ① |
| 2) 日本語慣用表現に興味がありますか?… () | はい 普通 いいえ |
- 3) 日本人は実際に慣用表現をよく使っていると思いますか?… ()
 4) 日本語学習において慣用表現の学習は必要ですか?… ()
 その理由を書いてください。… ()
 5) 日本語の慣用表現は難しいと思いますか?… ()
 その理由を書いてください。… ()

- (2) 日本語の慣用表現はどの段階から習い始めるのが望ましいと思いますか? その理由は?
 ① 初級から ② 中級から ③ 上級から / その理由は?… ()

(3) 皆さんの日本語能力のうち、慣用表現のみの学習能力はどのレベルですか？

